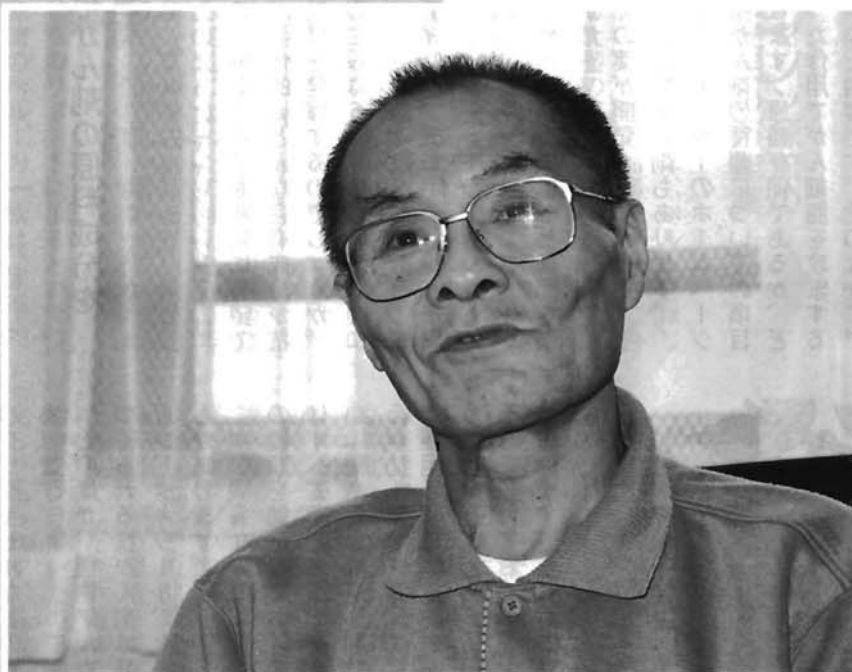




「生きがいを見つけない」と目を輝かせて語る永盛良夫さん（「きぼうのいえ」談話室で）

ドヤ街のホスピスの 穏やかな日々 —— なおも生きがいを求めて——

永盛良夫さん

住所不定、定職を持たず妻子とは離別。ホームレス生活が続けてきた63歳の男性が末期がんに侵されてしまった。波乱万丈のひと言では言い尽くせない人生の終着点で、たどり着いたのは山谷のドヤ街。掃き溜めの鶴のごとく聳え立つ、山谷「きぼうのいえ」、身寄りのない人のための緩和ケア施設だ。そこで“在宅ケア”を受けながら過ごす永盛良夫さんに、現在進行形の終末期を語っていただいた。膵臓がんの腰椎転移のため、車椅子の生活だが、末期がん特有の痛みは皆無だという。自らの人生を振り返り「後悔」、「反省」という言葉を繰り返す一方で、残り少ないこれからの日々のなかで、「働いて自立したい」「生きがいを見つけない」と目を輝かせる。

取材・文◎中山あゆみ

名門大学卒 一流企業エリートからの転落

山谷のホームレス。ひと口にそう言っても、残飯をあさるような路上生活者ばかりではない。定職には就かずとも、コソコソと日雇いの仕事で生計を立て、簡易宿泊所を住処とする“堅実”なホームレスもたくさんいる。永盛さんも、そのひとり。現在を語っていただくには、ここにたどり着くまでの過去について触れないわけにはいかない。「なぜ、あなたはホームレスになってしまったのですか？」と、ぶしつけな質問を向けるまでもなく、永盛さんは朗々と語り始めた。

「私は昭和14年、茨城県で生まれました。栃木県に養子に出され、昭和37年3月に中央大学法学部を卒業、4月から服部時計店に就職しました。昭和41年に結婚、2年後に長男が生まれました」

永盛さんの話は、履歴書を読み上げるがごとく、正確な年月日で始まる。メモを確認することもない。すべてが記憶されている。思い出の品など何もない。所持品はナイロンのスポーツバッグひとつという身軽な暮らしのなかで、情報は記憶という形で頭の中に確実に整理されてきたのかもしれない。

名門大学の名門学部を卒業し、一流企業に就職したところまでは人生表街道まっしぐら、であった。横道にそれたきっかけは、ほかならぬギャンブルである。競馬、オートレース、賭けマージャン。結婚前に会社から借りた100万円をギャンブルにつき込んだのが、ことの始まりだった。

「家を改築するためといって借りたのに、金使いが荒くて、競馬やマージャンで勝つと仲間におごったり、ストリップに行ったりして。借金が返せなくなって、結局、服部時計店を依願退職し



ました。給料をもらっても家には入れず、ほとんどギャンブルに使ってしまつて……。それで妻から離婚を切り出されました。息子は当時213歳。今はもう34歳になつてゐるはず。あれから妻は再婚したと思います。会いに行つてみようかな、と思つたことはありますが、行つたことはありません」

その後は、家電メーカー、貴金属卸、不動産業、旅行会社……。112年単位で職を転々とする。

「私は押しは強くないんですが、不動産屋にいたときには土地の契約が結構取れて、月に20130万円は稼いでいました。当時はそれで結構いい生活ができたんです」

意外に長続きしたのは、パチンコ店の従業員だった。個室と3食、制服付き、生活費がかからないうえに15万円ほどの給料がもらえたという。これが516年。東京サミットが開かれた年には、ホテルオークラ専属のガードマンだった。新聞の販売員は2年ほど続けたが、150万円もの赤字を出して辞めることに……。

「3カ月分の契約を1件取ると4000円、月に30人分の契約が取れると生活できたんですが、私はまるで取れませんでした。契約が取れないと1日2000円貸してくれるんですが、それがたまって150万円。契約を取るには、ウソをついたり、脅かしたりするくらいでないとダメなんです。君は向いてない、と言われて辞めました」

職を転々として、行き着く先は「土木作業員」であつた。道路の舗装工事の仕事で1日9000円、食費を引かれて手取り6000円。

「1日5000円あると、個室に泊まれて酒も飲めるんです。土木の仕事は年齢制限があつて60歳を過ぎると、もう雇ってもらえない。だから10歳若く53歳とウソをついて働いていました」

肉体労働の疲れに紛れた がんの症状

永盛さんは関東近辺を移動しながら415年の間、コンスタントに土木作業員の仕事をこなしてきた。月に20日の肉体労働、食費を引かれて月10万円の給料は、相変わらず酒とギャンブルに消えていった。

「少しお金が手元にあるときに、アパートでも借りればよかったのに……。反省しています」

年齢をごまかしながら何とか仕事は続けてきたものの、仕事の疲れが次第に堪えるようになってきたという。

「どうも体が思うように動かなくなつてきて、疲れが出てきたのかな、と思つていたんです」

日雇いの仕事に、健康診断を受けるチャンスなどあるはずもない。確実に永盛さんの体を蝕んでいた、がんの存在に気付くこともないまま、働いてはギャンブルに明け暮れる生活が淡々と続いていた。

警察につかまつたのが 幸運の始まり

そんな毎日が急展開したのは、競馬で所持金をスツてしまい、ぼんやりボーリング場でたずねていたときのこと。

「錦糸町のロッテ会館にあるサウナから出て、ボーリング場に座つて見ていたんです。さて、帰ろうと思つて立ち上がったたら、足元がフラフラッ

として、倒れた瞬間にだれかのバッグをつかんだんです。すると、周りにいた人が「窃盗だ!」と叫んで、私はボーリング場のフロントでガードマンに呼び止められました。私は転んだだけだと説明したんですけど、埒があかず、警察に行つて調べられました。留置所に入れられた後は、トイレに行くにも自力では立てなくなつていました。それで飯田橋の警察病院に入院・送致となりました」

窃盗の容疑がかつたままの入院であつて、入院中も2人の刑事が24時間付き添つたという。その後、容疑が晴れて一般病棟に移されたが、たまたま警察のお世話になつていたとあつて、入院の保証人は警察署。

「留置所で過ごした415日はひどく嫌な経験でしたが、何が辛いかわからないものです。路上で倒れていたたら、こんな形で入院できたかわからない。たまたまバッグをつかんでいなかったら、病院に来ることもなかったかもしれません」

全身の疲労感や筋肉の硬直する感じは、ずいぶん前から気付いていたが、すべては土木作業の疲れだと思ひ込んでいた。警察病院では、検査、検査で2カ月を費やしたという。

「脊髄に腫瘍ができていて血流を止めているので、手術をすると言われました。その結果、がん細胞が見つかつて、恐らく腫瘍から来ているのではないかと言われました。驚いたですよ。足が治つたら働いてお金をもらつて映画を観たり、お酒を飲んだり、ギャンブルもやりたいと思つていたのに、これは当分だめだな、とがっかりしました」

山谷の「きぼうのいえ」に たどり着いて

警察病院を退院した後は、NPOの福祉施設



「きぼうのいえ」施設長の山本雅基さん。「ここに来る人の過去は一切問いません。苦しんでいる人がいたら、差し伸べる手があれば出すだけです」

山谷のドヤ街の真ん中に立つ「きぼうのいえ」



「せせらぎ館」で2カ月ほど過ごし、現在の「きぼうのいえ」にたどり着いたのが今年の10月。鉄骨レンガ張りの4階建て。瀟洒な建物は、身寄りのない人々へのホスピスケアを目指す39歳のひとりの男性とその有志によって建てられた。21室すべてが個室。各部屋の入り口にはドアと表札があり、病室というよりは立派な住居である。温かみのあるオレンジ色で統一されたインテリアは、ホテルのようでもあり、「これがホームレスの施設？」とだれもが疑いたくなるような造りだ。

角部屋にある永盛さんの「家」に案内してもらうと、入り口には「永盛良夫」と木の表札、車椅子でも生活できる約5畳のスペースには、電動介護用ベッド、洗面台、冷蔵庫、ビデオ付きテレビが完備されている。

「ここは、まさに永盛さんのような方に入っていたただくために建てた家なんです。私たちは過去は一切問いません。ホームレスになった人々のことを人は自業自得と言うかもしれませんが、私は苦しんでいる人がいたら、

差し伸べる手があれば出すだけです。彼らの弱さを理解する人の支えがなかったら、看取る人もいないままひっそりと亡くなり、悲しい姿となって発見されることもまれではないのです」と、施設長の山本雅基さん。

看護師である妻の美恵さんとともに、病気のため自立生活ができなくなってしまう21人の入居者の終末期を支えている。身寄りがないことが入居の条件とあつて、入居者を訪ねて来る人はだれもない。ボランティアが家族代わりだ。オープンして2カ月。すでにひとりの入居者を見送ったという。スタッフの手で葬式も行われ、納骨を待ただけの遺骨がボランティアの集まる居間に安置されていた。

「今、いちばんうれしいこと。自分の力で排泄できること」

永盛さんのもとは、週3回、訪問看護師が訪れ、週に1度の入浴介助、排便、排尿のコントロールを行っている。「きぼうのいえ」のスタッフで作った食事を1日3回、普通に平らげると尿は自発的に行えないため、導尿のための管と尿をためる袋を常に携えているが、排便はトイレで毎日行う。この排便が目下、永盛さんの1日の大仕事となっている。

「今、いちばん心配なのは、お通じのこと。足が突っ張ってまっすぐに伸ばせない。自分の力できちんと便が出せたときは、本当にホッとします。失敗すると服を汚したりして人に迷惑がかかるから」と永盛さん。傍らで山本さんが、「お通じが出てすっきりすると、本当にひと仕事終えたって感じですよ」と相槌を打つ。「食べること、排泄すること、人の世話になるのはだれだって嫌なんです。病院ではオムツを着けっぱなしにするところもありますが、

そういうことはしたくない。どんなときでもギリギリまで自力でトイレに行けるよう協力する、それが人間の尊厳を守ることだと思います」。

「もし痛みが出て大丈夫」

医師のお墨付き

「今、痛みはありませんが、痛くなってきたら困るな……」と永盛さんが不安そうにつぶやくと、主治医の川越厚医師（HCCクリニック川越・院長）が、「それは永盛さん、コントロールできる。私が保証していますから」と太鼓判を押す。

薬は下剤を1日2錠。眠れないときに睡眠薬を服用するだけ。膀胱がんの末期にある患者が2時間座ったまま、休みなく語り続けている。今、目の前にいるのは、本当にがん患者？と疑いたくなるほどだ。

「もし病院に入院していたら、点滴につながれて立派な末期がん患者になっていたでしょうね。永盛さんは恵まれたがん患者さんです。束縛されない自由さがどんなに大切かがわかります。がんの末期で、こんなに生き生きと人生を語ってくれる人はなかなかいない。ご本人も自分の人生が100%いいと思っているわけではない。内心、忸怩たる思いでしょう。それでも明るく、前向き



「きぼうのいえ」の永盛さんの居室で。約5畳の個室に冷蔵庫やテレビ、エアコンも備えられている

ジャーナリスト。医療関係の新聞記者を経てフリーランサーに。新聞、雑誌に医療記事を連載。著書に『ドキュメント 子宮内膜症』などがある。

に生きていらつしやる。私とすごく話が合うんですよ」と川越医師は旧知の友のように話す。

「生きがいを見つけた。 それが何かはわからないけれど」

「タバコは1日20本吸っていますが、お酒はもう7カ月くらい飲んでいません。もうすぐお正月だから、ちよつと飲んでみたいなあ……」と永盛さん。

生活保護費のわずかな収入が、車椅子になり1級障害者の認定を取得してからは月18万円にはね上がった。「きぼうのいえ」での生活費を差し引いても、手元には十分なお小遣いが残る。

「今はもうギャンブルもやらないし、本を買ったり、タバコを買ったりする程度。でも、人の世話にはなりたくない。できるならもう一度、自分で働いたお金で、買い物したり、電車やバスに乗って行きたいところに行きたい。シモの世話までしてもらって、こういう生活じゃ、どうしょうもない。自分が蒔いた種と言え、その通り納得するしかない。1日1日無事に、同じような単調な生活を続けていって、できるものなら少しでも元氣になって自由になったら、それに越したことはないんですけどね。もう土木の仕事はできないし、これといって特技もないし」

今、楽しいと感じるのは、3度の食事とテレビ、読書をしているとき。ホームレス時代も、推理小説などを買い、読んでは古本屋に売って手放してきたという。部屋には、『文芸春秋』と『オール読物』の最新号が置かれていた。

会いたい人は？「親戚も関係ないし、友達もない。もしものことがあっても、別れた妻には知らせないでほしい。会ってもしょうがないし、かえってこつちがみじめな感じもする。それに、恐らく会ってはくれないでしょう」と、すべて割



取材に訪れた日は、たまたま川越厚医師の往診日だった。「永盛さんも、もし病院に入院していたら、点滴につながれて、立派な末期がん患者になっていたでしょうね」

り切った様子の永盛さん。これから、やりたいことは？と訊ねると、「生きがいを見つけていきたい。それが何かは、まだわからないけど」。少し寂しげだった表情が一変、明るくなった。暖かいベッド、安心できる空間に身を憩った今だからこそ、言えるようになった言葉なのかもしれない。

「私はお金の苦労はほとんどしていません」。永盛さんの唐突な言葉に、どう答えてよいのかわからなかった。借金がもとで離婚したのでは？ 毎日の寝る場所にすら困って生きてきたのでは？

「お金は天下の回りもの。お金をあんまり重視してこなかったために、結局はお金のために好きでもない仕事をしなければならなかった。よく言えば楽家ですが、一方で人から借りたものはすぐに返したい神経質なところもある。結局は自分に甘くて、お金の大事さをきちんとわかっていなかった」

「『会社四季報』というのをたまに見るんですけどね、大学時代、ギャンブルで稼いだ金でキャバレーでおごってやった友達、今は重役や社長になっていきますよ。検事になった人もいます。私も大学3年までは司法試験を目指していたんですから」

飄々と自らの生い立ちを語りながら、ときどき自嘲ぎみに笑う。よどみない語り口には、聞く者を引き込んでいく力がある。

「永盛さんのような人を人生の達人というのかもしれないよ。豪放磊落にして飄々とし、心境は明鏡止水のごとく、何があっても動じない。すべてを受容しているのです」。そう語る山本さんの表情は、まるで自分の家族を自慢しているかのようだった。

「きぼうのいえ」のドアを出ると、そこは紛れもなく山谷のど真ん中。仕事にあぶれた日雇い労働者たちが路地を埋め尽くす。過酷な人生の最後に、こんな暖かい行き場があるんだ、そう思えるだけで、どれだけ人々の心に希望を与えることだろう。